

『酒場の京都学』

加藤政洋*著、ミネルヴァ書房、2020年

本 岡 拓 哉†

本書は、近現代京都の歴史を紐解きながら、酒場という空間ならびにそれらが立地する都市空間の系譜を辿り直す文化誌である。著書である加藤政洋氏は『大阪のスラムと盛り場：近代都市と場所の系譜学』（創元社、2002年）以来、専門である人文地理学に社会・文化理論を接合することで、近現代都市の盛り場や花街の形成に関して多くの著作を刊行している。とりわけ編者となった『京の花街ものがたり』（角川学芸出版、2009年）、『モダン京都：〈遊楽〉の空間文化誌』（ナカニシヤ出版、2017年）に続く「京都もの」であり、今回は加藤氏の思い出が強い「飲酒」の場に特化した内容となっている。

洗練された筆致で綴られる本書は、読者の認識を様々な方法で揺るがし、酒場の空間文化誌への知的好奇心を大いに刺激する。酒場を生きる人々を客体ではなく、加藤氏自らを含めた能動性ある主体と措定し、近現代の様々な時期を往来、さらには文学作品ならびに史資料と現実世界の往還を繰り返す、あたかも読者を酔いへと誘うようだ。本書を肴にして、自身の酒場経験を流暢に語り始める読者も少なくないだろう。評者自身も、そもそも下戸のため酩酊させることはたやすいのだが、読了後、本来の飲酒では味わえないような陶酔感に浸り、酒場空間への関心が大いに増すこととなった。

評者の所感はともかくとして、構成と内容を整理する。本書は5章で構成され、序章と終章がそれらを挟んでいる。序章ではまず、複合と切り分けという独特な用途をもつ会館建築、ならびに裏通りや路地奥にある裏町の風景を糸口に、京都固有の酒場空間へと読者の関心を惹きつける。

第1章では、明治の終わり、若き谷崎潤一郎の滞洛体験記を端緒に、江戸期の名所に立地した料理茶屋をはじめ、「茶屋酒」の創出過程が辿られる。本居宣長も利用したという寺社境内の茶屋が衰退する一方で、明治以降は、旧来の料理茶屋に海川魚・鶏肉・牛肉などを扱う店が加えられた料理屋、それらとは機能分化した花街における貸座敷、さらには京都特有で風俗営業色の濃い特殊な旅館としての席貸、これら三つの場が京都の酒場として存在していくと言う。

第2章では、酒場が都市の消費文化として花開く大正期以降、作家の織田作之助をはじめとした、旧制第三高等学校の学生たちの遊歩に焦点が当てられる。東京では高等教育機関の周辺に「住／食」生活が賄われる下宿業が集積するのに対して、京都では学生の住まいは近隣の寺院や民家の空き部

* 立命館大学文学部教授

† 同志社大学人文科学研究所専任研究員
tmotooka@mail.doshisha.ac.jp

屋となるが多かった。こうした条件下、学生らは町へと遊歩し、新たな酒場空間の形成に寄与したというわけである。なかでも学生たちがこよなく通ったのがカフェであった。カフェはその後、風紀上、社会問題化し、取締の対象となる一方で、学生たちにとっては酒を介した文化的な社交の場となった。さらに、大正・昭和期は「一寸一杯」式の酒場が形成される時期であるが、本章では晩酌を愛する上戸たちの足取りを頼りに、現在の居酒屋に連なるような酒場の立地展開が復原される。

第3章は、京都における洋食と酒場の関係を読み解いている。昭和初期、洋食店のカフェ化が進行する中で、左党たちに愛用されたのが洋食バーであり、洋酒レストランであった。また、場所の力の影響か、それらの店舗と性格を異にした、京都特有の「色街洋食」と称される花街の洋食屋にも光が当てられる。蛇足だが、明治期における京都の洋食の低評価も興味深い。

そして第4章では、戦後、高度経済成長期の時代に目が向けられ、花街の変容と歓楽街の誕生の背景が考察されている。「歓楽街」を「『歓乐的雰囲気』を醸し出す風俗営業とその関連産業の集積する地区」と限定的に定義した上で、その形成と京都の地理歴史的な条件とが関係的に論じられている。既存の花街が衰退する中、一大歓楽街となった、通称、木屋町がターゲットとなる。そこでは、繁華街に隣接する交通の利便性のなか、既存の町家を生かす形で、バーを主としたサービス業が集積する状況が描かれ、「〈裏町〉という空間性が、歓楽街を成立させた」と締め括られる。

第5章は、繁華街である四条河原町近くの裏寺町を事例に、京都のもうひとつの酒場文化誌を描出する試みである。当地に関する文学作品の記述やこの地を愛した文人や学者たちの語りにとどまらず、様々な資料や地図の照合作業を通じて、文学的・空間的想像力によってその酒場空間がいかにかに定位されたのかが示されている。本章最後の「柳」をめぐる検証は、まさに本書が目指す、京都という都市の多面的な空間・文化史の隠れた一面への照射となっている。

終章においては、序章で紹介された京都固有の「会館」の謎が掘り起こされる。ここまで見てきたような、様々な形態の酒場のルーツが幾重にも折り重なっている有り様と、その縮図としての会館建築の姿が、「奥ゆき」として表現されている。

つづいて本書の研究上の価値について論じたい。まず確認すべきは、京都という都市は古都を基層にしながらも近代以降の変化が顕著であること、また京都府立京都学・歴彩館所蔵の行政文書をはじめ、様々な史資料が豊富に残されているということだ。それにより、歴史学者のみならず様々な研究者によって、京都近現代史はかなりの蓄積がなされているのだが、本書はそうした研究蓄積に厚みをもたらすとともに、さらなる研究領野の広がりを生み出していると言える。

研究領野の広がりをもたらすのは、これまで注目されなかった、京都固有の「酒場」という空間に光を当てることであり、その空間の描き方である。とりわけ後者は、文学作品や日記の読み込み、京都明細図などの地図や電話帳、写真を照合資料として活用すること、さらには現場を（飲み）歩くこと、すなわち実践的フィールドワークの成果をうまく調合しながら空間を記述することである。こうした著者の手法はこれまでの著作においても見られ、それが練達したとも言えるが、本書は酒場での会話やまち歩きで得られる肌感覚など、著者自身の経験が陰に陽に表現されることで、説得力が強まったと言えるのではないだろうか。これは冒頭で述べた、読者にある種の「酔い」をもたらすとの評価にも繋がる。

そして、本書の意義を確認すれば、やはり酒場空間それ自体、さらには京都という都市空間の「奥ゆき」という空間性に気づかせてくれる点である。本書が提示する「奥ゆき」とは、単に物理的な

距離や広がりの意味合いだけではなく、蓄積された歴史性やその時々が多様な社会関係を含みこむものである。

ただし、以上の論評を踏まえて気にかかる点もある。まず、本書が記憶を記録化できるエリート階層の行動空間や視界に入る景観に偏っているということである。近代京都を支えた様々な労働者や周縁に位置づけられるマイノリティをはじめ、都市に生きる人々と酒場との関係性はいかように展開していたのだろうか。この点について言えば、人々の連帯や分断のあり方と酒場との関係性、さらには労働運動や社会運動をはじめ、何らかの集団行為の拠点としての酒場に対する想像力も喚起されるだろう。1960年代の学生運動と酒場などもその一つの事例になるだろうか。

また、2019年に翻訳が出された、マーク・ジェインほか『アルコールと酔っぱらいの地理学』を踏まえると、酒場空間が有する男性性にも配慮する必要も思い浮かぶ。本書でも花街やカフェなどの事例で述べられてきたが、酒場は男性性が発露しやすい空間であると想起され、それらをいかに相対的にあるいは批判的に捉えていくか検討の余地があろう。これまで著者は花街研究において規制や取締、監視体制など公権力が空間に与える影響を明示してきたが、本書の対象に含まれない戦時体制や占領期における動向への探究も期待される。これらはきっと京都近現代史に新たな一面を照射する試みとなるだろう。

この書評を執筆する2021年1月現在、コロナ禍において、国内外の様々な都市と同様に京都の酒場は危機に瀕していると聞く。ここ最近、観光者のまなざしに迎合するような、上面の京都らしさが蔓延しているが、こうした状況が酒場を含め京都の都市空間で助長されないかという憂慮もある。画一的で閉じられた空間構成ではなく、多様性を含みつつ常に革新性を有した京都の「奥ゆき」は今後も生成し続けられるだろうか。現在の状況を、歴史的地理的な布置に照らし合わせながら批判的に読み解くことの意味は強まるだろう。その際、本書の成果は大いに参考となるにちがいない。

参考文献

ジェイン, M., バレンタイン, J., ホロウェイ, S.L. (2019) 『アルコールと酔っぱらいの地理学：秩序ある／なき空間を読み解く』 杉山和明・二村太郎・荒又美陽・成瀬厚訳, 明石書店.